

## 一発肥料栽培における追加穂肥について

本県の一発肥料は、温度に応じて溶出するもので、温度が高ければ溶出が早くなりますが、イネの生育も早まるため、結果的に概ね生育に合った溶出パターンとなっています。しかし、出穂前後に猛暑に遭遇した場合、イネの体力消耗が激しく、別途追肥対応が必要な場合もあり、「追加穂肥」は、一発肥料栽培において、穂揃期の葉色を適正な値へ誘導するための調整方法として考えられています。

ただし、本県の水稲作付面積の8割を占める「コシヒカリ」は、追肥の量やタイミングを誤ると、倒伏や過剰籾数となり米の品質低下につながります。それらを回避するためには、穂揃い期の葉色を4.2~4.5 (SPAD値 32~35)、砂壤土では4.5 (SPAD値 35)に誘導、維持する必要があります。追加穂肥の要否は、幼穂形成期以降の葉色で判断してください。

### ■幼穂形成期の葉色が3.8未満 (SPAD値 34未満) の場合は、出穂10日前頃にチッソ成分で1.0~1.5kg/10a程度の追肥をおこなってください。

チッソ追肥をおこない葉色の回復をはかってください。この時期にチッソ供給を怠ると、品質が低下するだけでなく、収量も少なくなります。なお、出穂10日前以前に施用すると、一穂着粒数が増えて乳白や芯白粒が増え、品質を落とす要因になるので注意してください。

### ■幼穂形成期の葉色が3.8~3.9の場合 (SPAD値 34~36) の場合は、出穂7~3日前頃にチッソ成分で1.0kg/10a程度の追肥をおこなってください。

葉色の判断が難しいので、SPADにより測定し、追加穂肥施用の基準としてください。

### ■幼穂形成期の葉色が4.0以上の場合 (SPAD値 36以上) の場合は、出穂7日前にも葉色診断をおこない、葉色が3.8未満の場合は、出穂7~3日前にチッソ成分で1.0kg/10a程度の追肥をおこなってください。

出穂3日前以降に追肥をおこなうと、玄米窒素濃度が上昇し食味が劣る原因となるので、注意してください。